

2022年度 日本文化人類学会 次世代育成セミナー
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 文化／社会人類学セミナー

発表要旨

NGO 女性グループをめぐる「もう一つの開発」ーバングラデシュ・ガロ社会の事例からー
上澤伸子（東京外国語大学 AA 研）

本論文の目的は、バングラデシュの民族的、宗教的に少数派であるガロの人びと、とりわけ女性たちを事例として、NGOによって組織された女性グループへの関与に、いかなる濃淡があるのかを明らかにすることである。1970年代、バングラデシュでは貧しい農村女性を支援するために、女性グループをつうじて小規模金融を貸し出すプログラムが創案された。それ以来、NGO女性グループと小規模金融はセットで展開されてきた。女性グループに関する開発研究は、経済的側面に焦点を当てられたものが主流であり、開発という閉じた空間におけるグループへの「参加」を均質的にとらえる傾向があった。本論文は、ジェンダー視点による開発言説の人類学研究における、既存の開発理論や開発実践を自明視しない立場におおむね同意するものである。その上で、それらの研究が一部の目立った政治行動を起こす女性たちに焦点を当て、その他のおおぜいの女性たちがいかに開発言説のレトリックと向き合っているかを明確にしてこなかった点を指摘する。本論文は村全体という空間軸と、世代という時間軸を加えることによって、開発実践の中核から遠くにいる女性たちが、村全体に行き渡る開発をどのように見ているかという点に注目する。そして、支配的な開発実践に深く関与する女性たちよりも、そこからやや距離を置く女性たちのほうが、生活を維持、向上させるために現実的な判断をしていることを示す。

日本社会における韓国食の受容と変容 - 韓国食を巡る日本社会及び人々の「匂い」を中心に
朴根模（名古屋大学）

食は、個々人の生存において欠かせない要素だけではなく、ある社会の文化的慣習や経済・社会的土台を反映している文化要素であるため、集団の社会的生存においても中心的位置を占めている。そのため、特定社会において新し食及び、食文化の出現は、食自体の味や作り方、食習慣といった食に直接かかわる要素だけではなく、該当社会の政治・社会・経済的背景といった食と直接関わっていない要素を含めた諸要素間の相互作用から行われる。このような、食の特徴と、韓国食が日本の食文化の一部として受容されている昨今の状況に基づいて、本稿は、日本社会における韓国食の受容と変容、その中でも、以上の文化的諸要素間の相互作用を通じる食文化の受容を直接的に経験する人々のミクロな経験に着目して議論を進めている。そのため、本稿は韓国食を巡る匂いの受容過程で見られる感覚と知覚の様子に注目する。匂

いを媒介とする嗅覚経験は、他の感覚経験に比べてその頻度は少ない一方、個人の経験としての密度は高いからである。そのため、代表的な韓国食の匂いとして思われるキムチとニンニクの匂いを取り上げ、それを巡って日本社会と在日及び韓国表象がどのように衝突し、ときには相互作用してきたのか、そのミクロな場面を捉える。また、そのことで、実在する異国的な匂いの感覚が、それを感じ取る人々の知覚に影響を与えるのかといった、匂いを受容する人々の感覚と知覚の相互関係について議論を進めていく。

“Tropismatic Entanglements/Disentanglements: Figures of Response-ability in the Rokugodote Homeless Village” (トロピズム的もつれ合い：六郷土手ホームレス村におけるレスポンスアビリティの在り方)

Ahmet Melik Baş (千葉大学)

In recent years, anthropologists have turned their attention to comprehensive analyses of the naturecultures, with a rambunctious emphasis on the entanglements of humans with more-than-humans, non-human animals, and things. In my research, I revitalize the notion of tropisms and elaborate on a Baradian neologism, intra-actions, to rethink about the entanglements and disentanglements of the human and nonhuman. My research addresses to (I) entanglements and their casual usage as permanent connectedness within an uncontrollable contingency, and (II) "adjective + entanglement" formulations in ethnographic writings lacking theory. Based on my 9-month ethnography along the Tama River in Japan, I present a method and logic of articulating intra-actions within a stimulated-stimulant relationality and contribute to discussions of human and nonhuman entanglement through tropismatic descriptions of stimulants such as water, light, electric, substance, mechanics, wound, and gravity. In this way, I use a tropismatic lens to elucidate the human and nonhuman entanglements/disentanglements by (a) defining the entanglement process as opposed to those who take it for granted, (b) juxtaposing a slew of disparate stimulants, practices, and incidents in coexistence, and (c) providing a fieldwork tool to reinterpret such disparate phenomena within an analytical framework. Building on this collection's theoretical and practical background, I reanalyze the Rokugodote Homeless Encampment and conceptualize intra-actions as a series of tropismatic entanglements and disentanglements in the light of vital responses revolving around energy infrastructures, scavenging, and destruction.